

# 坂本城と

# 明智光秀

## Ⅲ. 明智光秀に関する巷説

天海光秀説と坂本竜馬光秀一族説

平成 22 年 5 月作成



天海僧正像



坂本竜馬 図

坂本城を考える会

## 明智光秀に関する巷説？<sup>17)、18)</sup>

### 天海僧正－明智光秀

比叡山延暦寺に残された、「慶長二十年二月十七日奉寄進願主光秀」の石碑などから、天海とは光秀（又は光秀の子供）で、豊臣政権を滅ぼしたのは天海（光秀）の復讐との説がある。

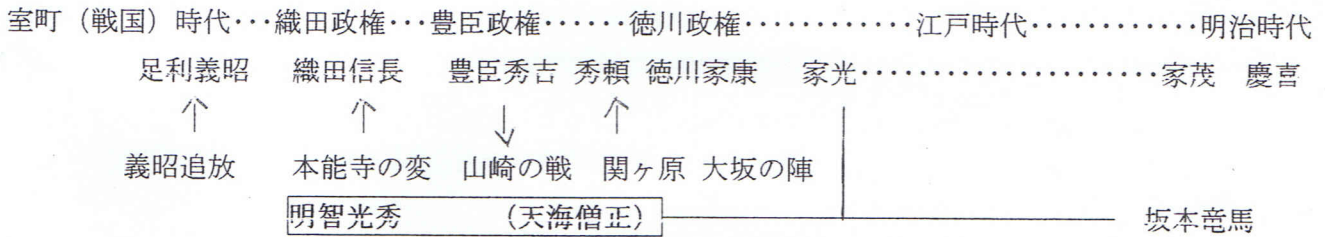
また、徳川家光の両親は家康とお福（春日局）であり、光秀の一族であるお福が家光の乳母となったのは、天海が関わっているという説がある。

### 坂本竜馬＝明智一族の子孫

坂本竜馬は明智一門で、明智光春の妾腹の子である太郎五郎が土佐に逃れたその末裔であるとの説がある。実際にはどうであったかとしても、少なくとも竜馬自身、明智光秀の子孫であるとの意識があったのではないかとされる。

そうとすれば、室町幕府、織田政権、豊臣政権、江戸幕府及び明治時代という流れの中で、これらの政権と明智光秀やその子孫がどう関与したのか興味深い。

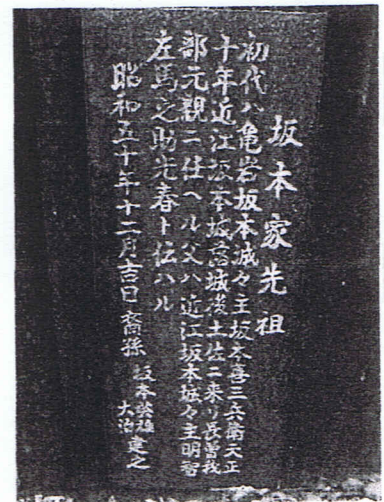
## 日本歴史における明智光秀の位置付け



延暦寺に残された石碑



斎藤利三の墓とうり二つの墓石



南国市亀岩 墓石

## 明智光秀、天海僧正、春日局の年譜

	明智光秀 (明智光隆と武田義統の娘)	天海僧正	春日局 (光秀の妹の子齋藤利三の娘)
享録 2 年 (1528 年)	出生?		
天文 5 年 (1536 年)		出生?	
永禄 10 年 (1567 年)	足利義昭の臣下となる		
永禄 11 年 (1568 年)	信長と義昭との初会見設定		
元亀元年 (1570 年)	宇佐山城主		
元亀 2 年 (1571 年)	叡山焼き討ち、坂本城築城		
天正 3 年 (1575 年)	惟任日向守の官位		
天正 4 年 (1576 年)	信長の安土城着工		
天正 7 年 (1579 年)			出生
天正 8 年 (1580 年)	丹波が光秀領となる		
天正 10 年 (1582 年)	本能寺の変、山崎の戦い、死去		
天正 17 年 (1589 年)		比叡山で修行か? 江戸不動院に入る	
慶長 5 年 (1600 年)		関ヶ原に在陣?	
慶長 9 年 (1604 年)			家光の乳母となる
慶長 13 年 (1608 年)		駿府で家康と会合    家康の宗教政策担当    東叡山寛永寺 江戸の霊的防衛網完成	
慶長 19 年 (1614 年)		大阪冬の陣	
慶長 20 年 (1615 年)	比叡山石灯籠を光秀奉納		
元和元年 (1615 年)		大阪夏の陣	
元和 2 年 (1616 年)		家康死去    日光東照宮造営 	
元和 8 年 (1622 年)	大僧正是春初名光秀が逝く	死去?	
寛永元年 (1624 年)			家光が将軍となる
正保元年 (1644 年)		死去?	
元禄 (1688~1704 年)	江戸幕府、『明智軍記』作成		

天海僧正は明智光秀である。 (『俊英 明智光秀』 佐宗邦皇)

明智光秀が小栗栖で死んだというのは誤り

小栗栖で光秀を殺し、その首を差し出したとされる、百姓の中村長兵衛を知る村人など実際にはいなかったとされる (『醍醐随筆』)。また小栗栖で光秀とともに死んだとされる二人の家来、進士作左衛門と比田帯刀は、その後細川興秋に仕えたとされる (『細川家記』)。さらに小栗栖で死んだのは光秀の影武者との記録もある (『美濃志』)。

光秀が小栗栖で百姓により殺されたとされるのは元禄年間に出された『明智軍記』によるが、その中では光秀を城造りの名人として、また本能寺の変についても織田信長の非道による因果応報と光秀を一応評価している。しかし主君への忠誠を組織原理とする江戸幕府にとり主殺しの光秀が政権の中枢にいたのではまずいことから、光秀が小栗栖で殺されたとした。

明智光秀は比叡山に逃れ、天海として生まれ変わった

小栗栖から逃れた光秀は比叡山へと逃げ込んだのであろう。そしてこの比叡山で、会津生まれの僧で、山で修行していたがすでに死亡していた随風という名前の僧 (これが本来の天海) と入れ替わったのではないか。これにより比叡山に、「慶長二十年二月十七日奉寄進願主光秀」の石碑及び「長寿院の二世法院であった権大僧都是春は俗名を光秀といった。長寿院の一世光芸によって剃髪を受け、その後当坊に起居し、鶏足院を監督、元和8年(1622年)9月25日に逝った」との記録が残されたのではないか。

明智光秀は、本能寺の変の黒幕であった徳川家康と再同盟した

やがて光秀(天海)は比叡山を下り東下、駿府で家康と対面した。本能寺の変の黒幕が正親町天皇の意向を受けての家康と光秀の共謀であり、信長死亡後、実行した光秀を見捨てて逃げた家康の負い目から、家康は光秀(天海)を政権の中枢に取り込んだ。

天海僧正は、「黒衣の将軍」として江戸幕府初期政権で大きな力を持った

天海は「南光坊智楽院」と称した天台宗の僧で、「慈限大師」ともいうが、大師号は平安時代の智証上人以来700年ぶりである。関東天台寺院を支配し、西の本山である比叡山延暦寺に対し、徳川家の菩提寺として、東の東叡山寛永寺を建立、本山の比叡山延暦寺を凌ぐ特権を与えられた。

また比叡山延暦寺にも大きな力を持ち、比叡山再興の祖とされ、比叡山の麓の坂本には、天海僧正の廟所である慈限堂が建立されている。また皇族の一員なみに「毘沙門堂門跡」の称号が下賜され、従四位に叙されている。

天海は密教・神道・道教・陰陽道・風水学に精通し、宗教政策を一手に握り、江戸の霊的防衛網を完成させた。

天海僧正は、光秀の一族の春日局(お福)を徳川家光の乳母とした

徳川家光の乳母であるお福(春日局)は、光秀の妹の子供にあたる斎藤利三の娘である。家光が秀忠とお江との間の子であれば、お江が織田信長の妹の子、お福が信長を殺した明

智光秀の一族であることから、家光の乳母としてお福が登用されるはずはない。家光という名前は家康の「家」と光秀の「光」からつけられたもので、家光は秀忠とお江との子ではなく、実際には家康とお福との間の子であり、このため、お福は家光の乳母となり、家光は三代将軍となったという説がある。またお福の息子である稲葉正勝は老中となり、養子の堀田家も代々幕府の中樞を占めている。

#### 天海僧正は家康と組んで豊臣政権を崩壊させた

天海僧正は、関ヶ原の戦いに家康とともに出陣、東軍に寝返った小早川秀秋の家臣の稲葉正成はお福の夫で、小早川秀秋の裏切りの背後にはお福があった。また第二の裏切りとなった脇坂安治、朽木元綱、小川祐忠は明智光秀の直臣（部下）で、この背後には天海僧正＝明智光秀があったとする説がある。

また関ヶ原の戦いの後に安国寺恵瓊が六条河原にて斬刑に処せられたが、恵瓊は戦いには参戦せず、ただ現場にいて中立を守っただけであり、主君の毛利は領国を削られたが、命は助けられているにもかかわらず、処刑されている。これは恵瓊が秀吉の中国大返しに当たり、秀吉と和解し毛利軍の軍旗まで与えたことへの天海（光秀）の復讐ではないか。

#### 天海僧正は、家康の死後も大きな権力を握っていた

家康を「東照大権現」として日光東照宮を造営、日光には明智の紋である桔梗紋が多く残され、日光明智平の地名もある。

#### その他

京都慈眼寺には光秀の位牌があること、大阪岸和田の本徳寺にある光秀の位牌の裏には、「当寺開基慶長四巳亥」とあり、光秀が慶長四年（1599年）まで生きていたこと、日光の雛型として造営された秩父神社にある武士と僧侶の像には桔梗の紋があり、武士は光秀、僧侶は天海ではないかとされること、天海の時代になって秩父札所34箇所の9番が明智寺、13番が慈眼寺と改名されたとされることなど、光秀と天海僧正との関連が考えられる。

#### 天海僧正は明智秀満である（『俊英 明智光秀』 永井 寛）

天海と明智秀満（左馬之助光春）とは年齢が一致し、坂本の盛安寺には、秀満がそこで僧衣に着替えたとの伝承がある。

#### 天海僧正は明智光秀の子供である（私信 山崎隆朗）

明智光秀が庶子を娶る前の愛人の桔梗に男子があり、妙心寺に預けられたが、南光坊として比叡山に上り、智楽院から天海と名を改めた。

### 坂本竜馬は明智光秀の一族からつながる (私信 坂本世津夫)

高知県南国市亀岩の墓石には、「坂本家先祖 初代は亀岩坂本城々主坂本喜兵衛 天正十年近江坂本城落城後土佐に來り 長曾我部元親に任へる 父は近江坂本城々主明智左馬之助光春と伝はる」とあるとされ、「明智左馬之助光春 妻 明智十兵衛光秀 長女」の墓もあるとされる。坂本竜馬の先祖(土佐での初代)である坂本太郎五郎の墓が亀岩の隣の才谷村にあり、この坂本太郎五郎は明智一族であると考えられる。

### 坂本竜馬は明智光春からつながる (『俊英 明智光秀』 永井 寛)

竜馬の先祖は明智左馬之助光春の子供である坂本太郎五郎であり、長曾我部元親の正室が斎藤利三の妹であったことから、坂本太郎五郎は、山崎の戦いの後に長曾我部氏を頼って土佐に逃れてきた。『天正十年夏記』によれば、丹波で捕らえられた明智左馬之助光春の妻を勧修寺晴豊が助けたとあり、この後、高知に逃れたのではないかとされる。

### 坂本竜馬は先祖が近江坂本の商人で、明智光秀の一族と信じていた

(『湖国と文化』 鶴飼修三)

竜馬の先祖は、明智を助けていた坂本の商人であった坂本太郎五郎(初代)であり、才谷の里に住み着いたと考えられ、4代目の八兵衛が高知城下に移り、才谷屋を名乗った。竜馬はその分家の次男で、初代から十代目にあたる豪士である。父は八平直足、母は幸。維新の地下活動に入ったときの名が才谷屋梅太郎といった。竜馬の紋所は、近江明智家と同じ「違い楸に桔梗」である。

竜馬が襲われた伏見寺田屋の女主人のお登勢は天津の出自で、竜馬の最後の地は京都の近江屋であり、近江屋主人の井口新之助は近江の出自であろうとされ、また竜馬の妻であるお龍の母は近江八日市の出自であり、このようなことから、少なくとも竜馬自身、明智一族の子孫であるとの意識があったのではないかとされる。

### 坂本竜馬は明智光春からつながる (『坂本竜馬海援隊始末記』 平尾 道雄)

竜馬の苗字「坂本」は、祖先が近江国坂本村に起こったのにちなみ、明智光春の妾腹の子の太郎五郎が坂本城落城の後に土佐に逃れた。

### 遠山金四郎は明智一族からつながる (『俊英 明智光秀』 中川 尚)

遠山左衛門尉(金四郎)景元は、美濃の明智遠山氏から分家した江戸遠山氏の出自であり、家紋に桔梗紋を使用している。